

シャルル＝レイ・フィリップ
『シャルル・ブランシャール』における
「時間意識」と人物描写について

東海 麻衣子

はじめに

1907年4月に木靴屋として働き通した父が亡くなると、作家であった息子シャルル＝レイ・フィリップは、その生涯を辿る作品を執筆しはじめた。だが、1907年5月頃着手されたその作品『シャルル・ブランシャール』*Charles Blanchard*は、夏には早くも難航し、12月には中断される。1908年9月から全国紙「ル・マタン」に週一回のペースで短編を寄稿するようになったことで時間が取られたこともあり、1909年秋、フィリップは執筆を断念するに至った。彼が一度着手した計画を頓挫するのは初めてのことであった。

ここでもし、アンドレ・ジッドの存在がなければ、『シャルル・ブランシャール』が日の目を見ることはなかっただろう。創刊したばかりのN.R.F. 誌に、この作品の掲載を切望していたジッドは、親友フィリップから二篇の断章—『シャルル・ブランシャール』第一章「寒さ」*I. Le Froid*, 第二章「木靴屋の家」*II. La Maison du Sabotier*を入手していた。その後まもなく、パリの病院でフィリップを看取ることになろうとは思ってもせずに...¹⁾。

こうして、ジッドは、フィリップから託された原稿をN.R.F. 誌1月号、2月号に掲載し、親友の遺稿を世に出した。その後、フィリップの終の棲家となったパリのアパートマンからは『シャルル・ブランシャール』のために書き溜められていた草稿が発見される。これらの草稿群は、ジッドやレオン＝ポール・ファルグラ、フィリップの親しい友人たちによってN.R.F. 誌等に掲載されていった。そして、1913年、これら断章および草稿群をまとめたものが、*Première version* と、その他の *versions*、*variantes* という二部構成で編纂し直され、『シャルル・ブランシャール』という一巻本が刊行されたのである²⁾。

ジッドは、この作品について、「フィリップにおける最も重要な作品」であり「文学史上類を見ない」作品であると述べている³⁾。たしかに『シャルル・ブランシャール』は、どの文学ジャンルにあてはめてよいのか分からないような独特な作品であ

る。これといったストーリーがある訳でもなく、読者を戸惑わせる。これに比する作品があるとすれば、1900年に出版されたフィリップの『母と子』*La Mère et l'enfant* しかないのではなかろうか。無名の新人だったフィリップが自費で出版した『母と子』は、思いがけず高い評価を得、数々の批評家たちが有名雑誌に概ね好意的な批評を載せたのだったが、そこで論議されたのは、これは、小説なのか、自伝なのか、散文なのか、詩なのかといった、根底となるジャンルの問題であった⁴⁾。その後、フィリップは、『ビュビュ・ド・モンパルナス』*Bubu de Montparnasse* を皮切りに、ストーリー性のあるものを書き、作家としての地位を築いていく。だが、死の寸前になって、再び原点に戻るかのように『シャルル・ブランシャール』という実験的とも言えるような作品を執筆しはじめたのである。母と自分の来し方を描いた『母と子』、そして、父の来し方を描いた『シャルル・ブランシャール』。それは、フィクションからはみ出る題材に対して、フィリップが最適であると考えた手法だったのかもしれない。

では、こうした手法において、作家が重視したのはどのような点だったのだろうか。ストーリー性が希薄な場合、必然的に重視されるのは描写力になるだろう。この作品でもやはり、フィリップの卓越した描写力が見て取れる。そして、その特徴として、フィリップがこれまでの全作品において追及してきた「時間意識」が人物描写を下支えしているという点が指摘できる。では、「時間描写」が、人物描写に対して、どのような作用を及ぼしているのだろうか。本稿では、この点について分析を試みたい。その際、フィリップ自身が出版に見合うとしてジッドに手渡した第一章「寒さ」、第二章「木靴屋の家」を例に取り、考察をめぐらすことにしよう。

母と子の「時間」

まずは第一章から見ていきたい。第一章で描かれるのは、寡婦である母ソランジュと七歳のシャルル・ブランシャールの貧困であり、とうとう物乞いまでしなくてはならなくなるような逼迫した暮らしぶりである。

全知の語り手は、町はずれの一軒の家について、外観から室内へと慎重に描写を進める。そして、家の中に足を踏み入れると、「扉を開き、一間しかない部屋に入ると、まず、そこにはないもののすべてが目につく」⁵⁾として、そこに「ないもの」から、次のように描き出していく。

我々の生活の伴侶であるこれらの家具：柱時計、たんす、食器棚は一つ一つなくなっていった。テーブル、三脚の椅子、ベッド、長持は残っ

ていたが、それらが心を慰めてくれることはない。というのも、それらは絶えず、もはやそれらしか残っていないということを思い出させるからだ⁶⁾。

アンドレ・ブルトンは、ドストエフスキーの室内描写を、カタログ図版のつまかさねのようだと言って、そのむなしさを非難したが⁷⁾、描写の必然性ということの問題にするとすれば、「ここにはないもの」として列挙されているシャルル・ブランシャールの家描写およびその順序には、緻密な計算がうかがわれる。まず、たんすと食器棚がないことで、衣食を彩るものがないことが示されるが、それよりも、筆頭に柱時計が挙げられることに注目したい。ここで重要なのは、シャルル・ブランシャールの家には、誰の家にもあるはずの柱時計がないということなのである。では、それはすなわち、彼らの生活に「時間」は介在しないということの意味しているのだろうか。

彼らの日課を辿ってみることにしよう。まず、シャルル・ブランシャールは毎朝、「7時少し前」に目を覚ます。母親は彼を起こすとベッドを片付け、「椅子に座って、じっとしているのよ」と言い置いて、あわただしく女中の仕事に出かけてしまう。彼は言いつけを守って、ひとりでじっと椅子に座っている。「7時から9時」はそれほど退屈することなく過ぎていく。「9時」になり、ひと仕事を終えた母親が戻ってくる。母親は急いでパンを食べると、再び仕事に出る。残された子供は、固いパンをできるだけゆっくりと食べ、「9時から9時半」までを過ごす。うまくいけば、「10時」までかかる日もあるが「10時」を過ぎると、時間を潰す気晴らしになるようなことは何もなくなる⁸⁾。母親は「正午」によく戻ってきて、二人は昼食をとる。彼らの昼食はしかし、「1時間半」もかかるような複雑なものではない。ひとかけらのパンとチーズで終わりである。そして、「1時が鳴ると」、母親はスカートを縫い始め、子供は、毎日1時になると、フランス中のすべての母親がつくろいものをしてなければいけないものだと考える⁹⁾。それが終わると、不幸な母親はきまって涙をこぼし、シャルル・ブランシャールも、もらい泣きする。こうしてのろのろと午後が過ぎていき、毎晩「7時」に夕飯として玉ねぎのスープを一皿食べる。そして、くたくたに疲れきったシャルル・ブランシャールは、すぐに眠ってしまう¹⁰⁾。

これらは、母と子の日課であり、登場人物である彼ら自身が意識している時間である。では、これらの時間を、柱時計のない家で、母と子はどのように知るのだろうか。先に挙げた例（注9）を見てみよう。「シンデレラの時計」¹¹⁾ではないが、「1

時が鳴ると」とあることから、彼らが音で時間を認識していることが分かる。だが、それが教会の鐘なのか、市庁舎の鐘なのか。どこから告げられる音なのかは明らかにされていない。これについては、後程明らかにしていきたい。

シャルル・ブランシャールの「時間」

ここまで見てきた母と子の日課は、母が不在である場合も含めて、二人が共有している「時間」である。主語が子供であり、その心理を描いている場合でも、そこで経過している「時間」は、母と子が感知しているとみなされる「時間」である。

しかしながら、次の場面はどうだろうか。以下に見るのは、ひとりぼっちの子供が10時からの「時間」を潰すために、ほかの母親が来てくれることを想像している場面である。

10時5分、よその母親はいない。10時10分、子供は驚く。10時15分、人生はおそらく、子供が思っているようにはできていないのだ¹²⁾。

母と子の日課の合間にはさみこまれるこの描写では、「時間」の刻まれ方が異なっている。母と子の「時間」は、30分、1時間ごと、最少の単位としては15分おきに告げられるのに対して、シャルル・ブランシャールの「時間」は5分刻みに意識される。そして、その停滞する「時間」の恐ろしさは、以下のように繰り返し描写される。

絶え間なく、人生から剥がれ落ち、かすかな音をたてて落ちていくこれらの分は、頭、肩、手足をゆっくりと覆っていき、晩には、重荷を背負っているように感じさせる¹³⁾。

落ちていく1秒1秒は、子供をいっそう深くこうした感情へと追いやった。1時間1時間が次にくる時間に指示を下し、毎日毎日が、引き下がる前に子供の頭に泥をおっ被せて窒息させようとでもしているかに思えるのだった¹⁴⁾。

このように、シャルル・ブランシャールの「時間」は、分と秒で刻まれ、日々は彼を窒息させる。では、この「時間」を刻むのは何者だろうか。柱時計も、もちろん懐中時計もない母子の家で、子供は、分刻みの「時間」をどのように意識するのだ

ろうか。次の引用を見てみよう。

もし、シャルル・ブランシャールが数を数えることができたなら、100年前からこれが続いていると思ったことだろう¹⁵⁾。

この文章からも明らかなように、分と秒の「時間」をカウントしているのは、シャルル・ブランシャールではない。子供と「時間」との格闘に立ち会い、子供の心理を言語化しているのは、懐中時計の「時間意識」を有するだろう語り手なのである。

教会の鐘の「時間」と木靴屋の「時間」

次に、第二章「木靴屋の家」を見ていこう。

第二章は、二つの部分に分かれる。前半は、シャルル・ブランシャールが12歳になり、木靴屋の弟子として働けるようになる日まで。後半は、シャルル・ブランシャールが木靴屋の弟子となってから、仕事に希望を見出すようになる日まで。

出口のない母子の状況を描いた第一章において、「時間」は大きな存在感を示していた。しかしながら、希望を見はるかす第二章においては、停滞し、死の影を漂わせていた「時間」の描写は姿を消す。前半で唯一現れるのは、最終パラグラフのみである。

待ちに待っていた息子が12歳になったその日。母親は、人に道をたずねながら、木靴屋である義弟の家へ急ぐ。ここで、「10時を告げる教会の鐘が鳴り亘っていた」¹⁶⁾という象徴的な一文が差し込まれる。フィリップの小説世界において、教会の告げる「時間」とは、幸福に包まれた世界の象徴である。ゆえに、第一章において周到に隠されていた「教会の鐘」の存在がここではじめて明かされるのは、母と子を死の影で覆い尽くす「時間」が霧散したことを意味していると考えられる。長い苦しみからようやく解放された母ソランジュは、教会の鐘に祝福され、力尽きて気を失う。

では次に、第二章の後半部を見ていこう。

後半の舞台は、町はずれの母と子の家から、町の中心にある木靴屋へと移される。そこは、車大工、家具屋、木靴屋がそれぞれ自分の仕事に精を出す職人街である。ここでもやはり、語り手は、町の様子から家の中へと描写を進めていく。

ひとたびバティストの家の敷居をまたぐと、人は、そこに入る前に目にしたものなどすっかり忘れてしまう。町の中心にあつて、まだ小さい

雛鳥を見守る雌鶏のように、家々を見守っている古い教会のことなども考えなくなるのだ¹⁷⁾。

「古い教会のことなども考えなくなる」という文章によって、小さな町の「時間」とは異なる「時間」が、木靴屋のうちに流れていることが示される。

まず描かれるのは、木靴や道具が溢れ返っている仕事場であり、そこで木と格闘する木靴屋バティストの姿である。ガストン・バシュラールが「一人の偉大な作家が、仕事の幻想化と道具の攻撃的な価値とを明かしているすばらしい文学的資料」¹⁸⁾と評して引用するのはこの木靴屋の描写である。闘いの最中に時の流れを感じる者はいない。ゆえに、仕事場の描写には一切の「時間」は入り込まない。

次に、木靴屋の家の中心である仕事場から、妻の憩う次の間へと描写は進む。仕事場と居間は、はっきりと分かれており、居間でくつろぎ、時間に沿って家事をこなしていくのは女たちであって、バティストがそこに足を踏み入れることはない。では、居間にある家具はどのように列挙されているのだろうか。

居間は取るに足らない場所だ。それは、仕事場ではない部屋というだけだ。そこにあるのは、ベッド、テーブル、数脚の椅子。そしてまた、食器棚、たんす、柱時計、そして暖炉の上の鏡の両側には、思いついたときに妻が花を生けるべく、二つの花瓶が置いてあった¹⁹⁾。

バティストと妻の住む家には、柱時計がある。ここでは、柱時計によって、「時間」が意識されている。つまり、彼らは自主的に「時間」を管理しているわけだが、しかし、つけたしのように挙げられる花瓶を除けば、家具の最後に姿を現す柱時計の存在は、この家において決して大きくはない。この柱時計は、子供を追い詰めたりせず、淡々と生活のリズムを知らせるだけなのである。

そして、シャルル・ブランシャールにとって決定的な瞬間が訪れる。

労働は、自らが選んだ人間を手放さないものだ。毎朝、6時が打たれると、子供(=シャルル・ブランシャール)は、叔父とともに起床する。始まったその一日もまたうつろなものだろうと思われた。椅子に座り、うつむいて、一日を悲しく見つめ、且つまた、一日を埋め尽くすべく、頭から重苦しい考えを引き離す必要があるだろうと思われた。そう、たしかに、一日はそうして始まった。しかし、1時間が経つか経たぬかの

うち、7時が鳴るかどうかという時に、バティストは言った。
「よう、今日は、お前に木靴を塗らせてやろう。」²⁰⁾

これを機に、シャルル・ブランシャールは、仕事に歓びを見出していく。そして、無為に過ぎ行く日々の積み重ねから解放されるのである。

おわりに

以上、『シャルル・ブランシャール』第一章「寒さ」、第二章「木靴屋の家」における描写について見てきたが、我々はここで、人物の身体的描写がほとんどないことに言及すべきだろう。第一章では、登場人物である母親ソランジュ、子供シャルル・ブランシャールの外見について何も描かれていない。第二章で登場する木靴屋のバティストやその妻についても同様である。

唯一描かれるのは、第二章前半になって、母親がはたと我が子の異常さに目を見張る場面である。

彼（＝シャルル・ブランシャール）を見ると、人とは違った人間もいるのだということが了解された。彼はかろうじて人間としての形をなしているにすぎなかった。腕は長すぎ、首は細すぎ、かぼそい両脚は胸までせりあがって、腹の場所を奪っているかのような印象を与えていた。両目は大きすぎ、青すぎ、その目の印象を描こうとしても無駄に終わっただろう。その目と比べられるのは、奇妙な何ものかが現れ出て、人を遠ざけてしまうような狂人の目しかなかったろう。

透き通った頬の下にある、その無色の肌は水と混じり合っているかようだった。汗ばんだ肌というのではなく湿った肌をしていた²¹⁾。

この後も、これまでの劣悪な環境を裏付けるように、子供の奇怪な印象が描き連ねられ、母親がはじめて我が子の姿を認識するかのようになり、主人公であるシャルル・ブランシャールの外見が明らかにされていく。登場人物の外見描写はこの部分のみである。しかしながら、我々はなかなかそのことに気が付かない。というのも、登場人物たちは皆、生活環境や言動の描写によって、読者がたやすく想像できるような人物像たり得ているからである。そして、その内には、彼らがどのような「時間」の中に身を置き、どのような「時間意識」を有するのかという点が大きく作用しているのである。

本稿では、この物語に、二種類の「時間」が存在することを見てきた。

まず一種類目は、「客観的時間」。それぞれの空間に居住する登場人物が意識する「時間」であり、物語のうちに客観的に流れている（と見せかけられた）「時間」である。このうち一つは、母と子の家の「時間」である。これは、柱時計のない、つまり、自分自身で「時間」を管理する術をもたない者の住む家に流れる「時間」である。二つ目は、木靴屋の「時間」である。これは、教会の「時間」も柱時計の「時間」も入り込むことのできない仕事場の「時間」である。これら「客観的時間」は、空間と人物を結び付け、人物のイメージを豊かに彩る。

そして、もう一種類の「時間」とは、「主観的時間」。つまり、主人公の主観的な「時間」である。これは、主人公の「時間意識」であるように見せかけられているが、実は、語り手の解釈であり、語り手によって綴られる主人公の心理描写となっている。

柱時計のない家において、シャルル・ブランシャールは、母親に従属するだけの存在として描かれていた。「時間」を数えることを知らない子供にとって、分と秒に細分化され、量感を増していく「時間」とは、永遠に続く重石である。

だが、物のように存在していた子供は、木靴屋で働き始め、ようやく生き始める。そして、シャルル・ブランシャールは、語り手によってカウントされていた「時間」から解放され、労働によって救われ、職人の「時間意識」を獲得していくのである。

静から動へ、影から光へ、居住空間を移動することで、異なる「時間意識」を身につけ、主人公シャルル・ブランシャールは別の人物へと生まれ変わる。フィリップは、人物描写に「時間意識」をもちこむことで、独自の手法を生み出した。

フィリップは、ある草稿の中で、この作品を「不幸な子供、シャルル・ブランシャールの物語」として終わらせるのではなく、木靴屋に弟子入りし、一人前に成長していく姿を描くことで、「にこやかな青年、シャルル・ブランシャールの物語」として完成させたいと語っている²²⁾。その意図は、作家の卓越した描写術によって、短い紙数のうちに果たされていると言えるのではないだろうか。未完の作品として放棄されてしまったが、フィリップがジッドに手渡したこの二篇の断章は、それ自体完成した中編作品と言ってもよい完成度を誇っていると考えられるのである。

注

引用下線および本文中の和訳はいずれも筆者による。

- 1) ジッドは日記の中で、フィリップが息を引き取ってからセリイの葬式に参列するまでの様子を克明に記している。Cf., André Gide, «La Mort de Charles-Louis Philippe » in *Journal 1887-1925*, présenté et annoté par Éric Marty, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1996, pp.615-624. なお、同日記は修正され、N.R.F. 誌「フィリップ追悼号」に再録された。Cf., André Gide, « Journal sans dates » dans *Numéro consacré à Charles-Louis Philippe, La Nouvelle Revue française*, 15 Février 1910, pp.289-300.
- 2) Cf., Préface de Thierry Gillybœuf dans Charles-Louis Philippe, *Charles Blanchard, La Part Commune*, pp.7-25.
- 3) Il ne me suffit pas de dire que *Charles Blanchard* devait être l'œuvre la plus importante de Philippe (en attendant les œuvres suivantes) ; j'ajoute que cette œuvre, telle qu'elle nous a laissée, déjà parfaite dans son état fragmentaire, me paraît unique et sans équivalent dans la littérature. (André Gide, « Charles-Louis Philippe, conférence prononcée au salon d'automne », *Œuvres complètes tome d'André Gide VI*, édition augmentée de textes inédits établie par L. Martin-Chauffier, Gallimard,1932, pp.164-165.)
- 4) Cf., Charles-Louis Philippe, *La Mère et l'enfant, Le Père Perdrix* présenté et établi par Bruno Vercier, Gallimard, p.285.
- 5) Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes tome V*, édition présentée et établie par David Roe, Ipomée,1986, p.142.
- 6) *Ibid.*
- 7) Cf., André Breton, *Manifestes du surréalisme*, Jean-Jacques Pauvert , 1962.
- 8) Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes tome V*, pp.143-144.
- 9) « Charles Blanchard s'habitua de bonne heure à l'idée que chaque jour, lorsqu'une heure sonne, toutes les femmes de France ont le devoir de raccommodeur leur jupe. » (*Ibid.*, p.146)
- 10) *Ibid.*, p.149.
- 11) Cf., 角山栄 『時計の社会史』, 中央新書, 1984.
- 12) Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes tome V*, p.144.
- 13) *Ibid.* p.154.

14) *Ibid.*, p.155.

15) *Ibid.*, p.159.

16) « Elle demanda à un passant de lui montrer la maison de son beau-frère. Dix heures sonnaient au clocher de l'église. Elle ouvrit la porte qu'on lui avait indiquée. Baptiste Dumont était tout seul dans la boutique et travaillait à ses sabots.

— Baptiste, faut venir chercher le petit.

Ce ne fut qu'ensuite qu'elle s'évanouit. » (*Ibid.*, p.167)

17) *Ibid.*, p.168.

18) Gaston Bachelard, *La Terre et les rêveries de la volonté*, José Corti, 1948, p.56.

19) Charles-Louis Philippe, *Œuvres complètes tome V*, p.174.

20) *Ibid.*, pp.178-179.

21) *Ibid.*, pp.160-162.

22) « Nous n'arrêtons pas ici le livre de sa vie, et comme aux temps romantiques, alors que l'on aimait les larmes, nous n'acceptons pas son jeune désespoir, et nous n'intitulerons pas le véridique récit de ses premières années : Histoire de Charles Blanchard, l'Enfant du Malheur. (...) Si nous allions intituler ce livre : Histoire de Charles Blanchard, le riant jeune homme! » (*Ibid.*, pp. 246-247)

Description des personnages et temporalité dans *Charles Blanchard*

Maiko Tokai

Charles-Louis Philippe laissa certains fragments de *Charles Blanchard*, œuvre qui suivait la vie de son père. Après la mort de l'écrivain en 1909, cette œuvre originale, roman sans intrigue particulière, émerveilla ses amis dont André Gide, qui rassembla et mit en forme une dizaine de versions et de variantes.

Notre analyse concernera plus spécialement la description des personnages dans *Charles Blanchard*, laquelle retient en effet l'attention par la portée que le Temps exerce sur cette œuvre inachevée. Nous relevons deux sortes de Temps qui baignent le récit. En premier lieu, le *Temps objectif* : celui qui s'écoule chez la mère et celui qui s'écoule chez le sabotier. Ces *Temps objectifs* « en apparence » qui se lient avec l'espace, caractérisent l'image des personnages. En second lieu, le *Temps subjectif*, simulant le Temps conçu par le personnage principal, mais de fait interprétation du narrateur.

Dans le Temps chez la mère, Charles Blanchard est décrit comme un enfant malsain sous la dépendance de sa triste mère. Dans l'espace sans horloge, il est tourmenté par le Temps qui s'amasse et qui règne sur les hommes. Et se déplaçant chez le sabotier qui ne compte guère le Temps, l'enfant se transforme. Il devient vif grâce au travail.

Nous pouvons alors remarquer dans ce récit que le Temps lié à l'espace est susceptible de former aussi le *Temps subjectif* de l'existence même de l'homme.